



馬耳東風

うれしいニュースが駆け巡った。CO₂が2倍になると気温が2.3℃上昇するという気候大循環モデルを開発完成し、地球温暖化現象を解明した物理学者の真鍋淑郎博士がノーベル物理学賞を受賞されたニュースだ。地球規模の課題の科学的な現象を解明した世界的な功績者である。「好奇心」が研究の原動力であったという。発表時の記者会見で、アメリカの自宅リビングが映し出され、壁に掛けられた扁額が目立って気になった。何と東洋的な大きな見事な筆勢に長けた墨書ではないか。しかも二つが横並びである。筆跡から活力に満ちた同一人物の作品のようだ。墨書の詩文が気になって掲載新聞を漁った。まず朝日新聞の天声人語で見つけた。会見した特派員は「南紀の海はその一角だけが荒れ騒いでいた……」の著名な作家・井上靖の「渦」の一節だという。静岡新聞の記事で井上靖文学館の学芸員によると友人のいる和歌山・南紀の情景を描き小説のモチーフにもなったという。「知名度は決して高くなく、なぜこの一説を抜粋したのか」と驚きをもって報じている。その後、もうひとつの扁額について河北新報が大きくこう取りあげた。「ノーベル賞真鍋さん宅に『白鳥省吾』の詩」との見出しである。河北新報は仙台地方を中核とする東北を包括する有力地方紙である。目にした読者の驚きと喜びの顔が目に浮かぶ。白鳥の墨書の詩は1922年発行の第6詩集「共生の旗」に収録された「夕景」の第1連の抜粋だという。3連構成で小牛田から石巻港までの列車で見た厳冬期の農村の貧しさが描かれていると詳しく説明して

いる。「凍え行く夕暮れの『広野は暗紫にとろとろ雪の白を点ず／寒き地の肌氷に閉ざされし枯草』に雪の上に／煤ふらし咽びゆく」と煙を吐きながら貧しい厳冬期農村の野原を走り抜ける汽車の窓から見た心境が綴られている。省吾は東北三県の県境にそびえる紅葉で名高い名峰栗駒山を見て育ち郷里を心から愛し、農民の魂を持って民衆詩の論陣を堂々と張った詩人である。戦争を憎み、大地に生きる農民生活の貧しさを真正面からとらえている（殺戮の殿堂、耕地を失う日）。真鍋博士が異国に在りながらこの詩を心に刻み、まさに日本の魂を持って研究に専念され立派な功績をあげられたことがうれしく懐かしくしのばれる。

気候変動は、世界が注目する政治課題であり研究課題である。COP26が最終盤の交渉で「上昇1.5度」の目標が射程に入り世界目標と位置づけた。脱炭素への各国の取組みが目標化され石炭火力発電や非効率な化石燃料への対策が組み込まれることになる。一方、生物多様性の保全は気候変動にも有効である。心配される生物多様性の劣化は、食料や水、健康など人類の生存基盤を脅かしている。東大・橋本禪准教授は、気候変動の抑制と生物多様性の保全は持続可能な社会に欠かせず、気候変動対策に相乗効果をもたらすことが多いとしている（朝日地球会議）。大量絶滅時代とも言われる現代、日々生活の中で脱炭素社会と生物多様性保全の構築に向けた努力がなされているはずだ。環境危機時計が危険度を示し始めているのも現実なのだ。未来をしっかりと見つめる年でありたい。

(柏)